

未来を思い描くとき…

学校長

この夏「甲子園 100 周年」のイベントが組まれるなどして、全国高等学校野球選手権大会が例年以上の盛り上がりを見せました。大会自体は 106 回目ですが、甲子園球場での開催が 100 年になったことによる企画でした。開会式では、智弁学園和歌山高校の辻主将から、「僕たちには夢があります。この先の 100 年も、ここ甲子園が聖地であり続けること。そして、僕たち球児の憧れの地であり続けることです。」と選手宣誓があり、私は深い感動を覚えました。今の自分の幸せから過去の 100 年に感謝し、未来の 100 年への祈りを素直に表現していたからです。

100 年後も憧れの地であり続けるため…と考えたときに、少子化の中どうやって競技人口を保っていくか、炎天下の大会を安全に運営するにはどうしたらよいか、人々に今以上に支持されるためには…等、関係者が多方面にわたって議論し、次々と新たな対策を実行していることに機動力のよさを感じていましたが、中心にいる選手自身が主体的に受け止めていたことも感動した要因だったかもしれません。希望をもって未来を考えると、人は優しくなれたり、強くなれたりするのですね。

実は、本校にも、未来を思い「10 年後の坂中生へ」とメッセージを残してくれた事実がありました。これは、平成 18 年度の生徒会が創立記念行事の際に全校で取り組んだ企画で、本来なら、平成 28 年度に在籍した生徒に贈られるはずのものでした。多分、その後の東日本大震災やそれに伴う耐震性の問題から撤去された東校舎からの移転などの混乱で忘れられていたものが、閉校に伴う校舎内の片付けによって、倉庫からタイムカプセルとして見つかったのです。「10 年後の生徒会長へ、野球部・サッカー部…の背番号〇番の人へ、吹奏楽部のフルートパート・サクソパート…の人へ、〇年△組□番の人へ」など、いくつか目を通しましたが、それは、様々な後輩を想定した多様なメッセージでした。

渡すはずだった平成 28 年度の生徒たちにはもう届ける術がないので、当時本校に勤務した教員と連絡を取り、現在の生徒たちにメッセージを読んでもらうことで、当時の生徒たちの思いを汲み取ってもらうことにしました。どんなメッセージが生徒たちの心に届けられるか、今後、回覧する予定です。

未来を思うとき、私たちは今と同じ平和な世の中が続いている、母校はいつまでも存続していると信じていましたが、年度末の閉校は、それが当たり前ではないことに気づかされ、今感じている平和も世界の努力なしでは崩れてしまうことも知ってしまいました。高校球児の熱い思いのこもった選手宣誓から、希望をもって未来の平和と繁栄を祈るにはどうしたらよいか、そんなことを考えさせられた夏でした。